

7月13日（月）サムエル記第二21章1節

「ダビデの時代に、三年間引き続いて飢饉が起こった。それで、ダビデは主の御顔を求めた。主は言われた。『サウルとその一族に、血の責任がある。彼がギブオン人たちを殺戮したからだ。』」（1節）

ダビデの時代に三年間引き続いて飢饉が起こりました。これは、住民たちにかかなりの影響を与え、相当数の飢えた人たちがいたものと思われます。これほどのひどい飢饉を人の力ではどうすることもできませんから、ダビデは主の御顔を求めます。恐らく聖所へ行き、祈りつつ主のことばを聞こうとしたのでしょう。すると主は「サウルとその一族に、血の責任がある。彼がギブオン人たちを殺戮したからだ。」と言われました。ギブオン人たちとは、ヨシュア記9章3～27節に記されてありますように、ヨシュアがカナンの地に侵入し、そこに住む住民を滅ぼした時に、ギブオン人たちは彼を欺きました。実際には、エルサレムから北に数キロしか離れていないにもかかわらず、はるか遠方からやって来たようなふりをしました。ヨシュアは主の指示を求めず、彼らと和を講じ、彼らを生かしておく盟約を結びました。（15節）そして彼らは、会衆のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所で薪を割る者と水を汲む者となりました。しかし、このヨシュアが結んだ盟約にかかわらずサウルは、ギブオン人たちを殺戮したのです。

このサウルによるギブオン人たちの殺戮については、聖書に記述がありませんので詳しいことは分かりませんが、言えることは、サウルがヨシュアの交わした盟約を破ったことは主の御前に大きな罪であったということです。私たちは犯した罪を簡単に忘れることがあったとしても、主は人が犯した罪を決して忘れることなく、時にはそれに気づかせられることがあります。主の御前にそのような罪を犯したことも問題なのですが、それと同時に示された罪をどのようにするのかということも問われています。まるで、そのことは時効になってもはや関係ないとばかりに無視しようとするのでしょうか。むしろ、主は私たちが真摯な態度で、そのような罪にきちんと向き合い、悔い改めるべきことはきちんと悔い改めることを求めておられるのです。それは、真実な悔い改めを通して、主は必ず私たちの罪を赦してくださるからです。私たちに悔い改めるべき罪はないでしょうか。主は、何か罪を示されてはいないでしょうか。

7月14日（火）サムエル記第二21章2～14節

「その後、神はこの国の祈りに心を動かされた。」（14節）

ダビデはギブオン人たちを呼び出し、話を聞こうとします。2節に「イスラエル人は彼らと盟約を結んでいた」とありますが、昨日見ましたように、これはヨシュアがギブオン人と結んだ盟約です。「イスラエルとユダの人々への熱心のあまり」とありますが、どんな事情があったにせよ、サウルはしてはならないことをしたということです。ダビデは、何とかして三年間続

く飢饉から国を救わなければならなかったので、「私が何をもって宥めを行ったら、主のゆずりの地が祝福されるだろうか」と言います。そして4節においてギブオン人たちは、経済的な問題ではないと言い、自分たちに司法権がないので自分たちの手で処刑するということはできませんし、イスラエルの地で自分たちが復讐のために命を奪うということを望んではないと言います。むしろ6節でサウルの息子七人の引き渡しを要求しました。それにダビデは応じます。8節にギブオン人に引き渡された者たちの名が記されてありますが、8節のメフィボシェテは、7節に出てまいりますヨナタンの息子のメフィボシェテとは別人です。こうしてサウルの直系の子孫全員が引き渡され、この者たちが山の上でさらし者にされ、大麦の刈り入れの始まったころ殺されました。アヤの娘リツパは、二人の息子（アルモニとメフィボシェテ）を失いましたが、死体に鳥や野獣が近づかないように守っていました。そして、これは死体が埋葬されていなかったことを意味しています。そのことがダビデの耳に入りますと、そのことに心を動かされたダビデは、サウルの骨と息子ヨナタンの骨もヤベシュ・ギルアデの人々のもとから携え上って、さらし者になっていた者たちの骨を集めました。そしてサウルとヨナタンの骨につきましては、サウルの父キシユの墓に葬りました。そして「その後、神はこの国の祈りに心を動かされた」とは、神が持っていた怒りを鎮められたことを意味しています。

今日の個所からも罪は手軽にいやされるものではなく、また人の側の考えによって処理されるべきものでもなく、ふさわしい扱いが必要であることを思われます。そのためにイスラエルには贖罪の規定が定められたのですが、私たちには罪のない神の御子イエス・キリストが与えられ、そのイエス様が私たちの罪をすべてその身に負い、十字架で苦しみ、血を流し、いのちを捨てられるというさばきを通して私たちの罪が完全に赦されたのです。それこそが神のみこころにかなったことだったのです。今日もイエス様の十字架を通して罪が赦されたことを主に心から感謝しましょう。

7月15日（水）サムエル記第二21章15～17節

「ダビデは自分の家来たちを連れて下り、ペリシテ人と戦ったが、ダビデは疲れていた。」
(15節)

8章1節では「ダビデはペリシテを討って、これを屈服させた。」とありますが、21章15節にも「ペリシテ人が再びイスラエルに戦いを仕掛けたことがあった。」とありますように、イスラエルは常にペリシテとの戦いを余儀なくされていました。ダビデはペリシテを迎え撃つために「自分の家来たちを連れて下り、ペリシテ人と戦ったが、ダビデは疲れていた。」とあります。寝不足程度の疲れではなく、恐らく戦いに出られず、16、17節にありますように、アビシャイがダビデを助けて、ペリシテ人を打ち殺さなければ命の危険にさらされるほどの疲労であったということです。そして、ダビデの部下たちは、「あなたは、もうこれから、われわれと一緒に戦いに出ないでください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。」と言いま

した。つまり、王は国と政治や軍事の中心であり、主の契約の当事者です。ですから主が立てられた王がいなくなるということは、国の存亡に関わるということを意味しています。

誰であっても疲れをおぼえることがあるでしょう。特に歳をとればとるほど疲れを感じやすくなるものです。ここで大切なことは、兄弟姉妹の間で疲れを決して隠すことなく、疲れたと言える関係が必要です。無理して奉仕をしなければならないとか、一部の人に奉仕を任せきりにしないように周りが気遣うことが必要です。そしてアビシャイがダビデの命を救ったように、常に周りの人々で互いにサポートしていく体制が必要です。それは、教会に集っているお一人お一人の兄弟姉妹たちが、私たちの教会のともしびだからであり、もし仮に一人の方が、疲れ果てて教会に来られないということになれば、それは教会の大切なともしびが消えてしまうことになるからです。イシュビ・ベノブが、「ダビデを討つ」と狙っていたように、サタンは疲れ果てた信徒をターゲットにして、教会に行くことを妨げ、そのともしびを消し去ろうとします。そうならないように、私たちは支え合いながら、また祈り合い、ケアし合いながら、教会を明るく照らすともしびとして、ともに教会生活を送ってまいりたいと思います。

7月16日（木）サムエル記第二21章18～22節

「ゴブでペリシテ人との戦いが再びあったとき、ベツレヘム人ヤイルの子エルハナンは、ガテ人ゴリヤテを打ち殺した。ゴリヤテの槍の柄は、機織りの巻き棒のようであった。」（19節）

今日の個所で、ずっと議論がなされているのが19節の「ゴブでペリシテ人との戦いが再びあったとき、ベツレヘム人ヤイルの子エルハナンは、ガテ人ゴリヤテを打ち殺した。ゴリヤテの槍の柄は、機織りの巻き棒のようであった。」の箇所です。ここがサムエル記第一17章と矛盾するのではないかとされています。そのような問題を解決するために、さまざまな提案がなされていますが、例えば並行箇所である歴代誌第一20章5節には「エルハナンがゴリヤテの兄弟ラフミを打ち殺した」とありますので、打ち殺されたのはゴリヤテではなく、兄弟ラフミだと主張する人があり、またヤイルの子エルハナンをエッサイの子ダビデだと説明する人もあります。その場合にエルハナンとはダビデの一族における名であると説明されています。そして、最も可能性があると思われるのが、イスラエル人は、ペリシテにおいてゴリヤテのような巨人を見るなら、その人をゴリヤテと呼んだのではないかと主張です。そして22節のラファの子孫は巨人の子孫であるとも言い換えることができます。

いずれにいたしましても、ラファの子孫は皆体が大きかったのではないかと思います。しかしフシャ人シベカイは、ラファの子孫のサフを打ち殺しました。（18節）ベツレヘム人エルハナンは、ガテ人ゴリヤテを打ち殺しました（19節）そしてイスラエルをそしった四人目の闘士は、ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが打ち殺しました。ペリシテ人たちについては、さまざまな武器の説明がなされています。「彼の槍の重さは青銅で三百シェケル。そして彼は新しい剣を帯びていた。」（16節）「ゴリヤテの槍の柄は、機織りの巻き棒のようであった」（19

節)「手の指、足の指が六本ずつで、合計二十四本指の闘士がいた。」とあるとおりですが、しかしダビデの家来たちには、そのような記述は一切ありません。それはダビデとその家来たちが、武器ではなく信仰によってペリシテの兵たちに立ち向かった結果、主によって勝利を得られたことが意味されています。私たちが戦わなければならない敵は非常に強力ですが、主がともに戦ってくださるので、私たちは信仰により勝利をすることができることを信じて進みましょう。

7月17日(金) サムエル記第二22章1節

「主がダビデを、すべての敵の手、特にサウルの手から救い出された日に、彼はこの歌のことばを主に歌った。」(1節)

1節は、ダビデが2節以降で歌う歌の表題です。そして欄外注にもありますが、詩篇18篇と同じものと考えられます。そして詩篇18篇は、ダビデの人生の中で起こったさまざまな出来事との関連で歌っている13の詩篇(3篇、7篇、18篇、34篇、51篇、52篇、54篇、56篇、57篇、59篇、60篇、63篇、142篇)の一つです。できれば、それぞれの詩篇を開き、詩篇の表題を確認して、ダビデがどのような状況で、どんな詩を読んだかを味わっていただければ幸いです。

1節に「すべての敵の手、特にサウルの手から救い出された日に」とあります。手とは力とも言い換えることができます。つまり、主なる神の御手は、ダビデに敵対するどんな者の手よりも力があるがゆえに、ダビデをすべての敵の手から救い出すことができたのです。私たちも、これまでのキリスト者としての歩みの中で、力強い主の御手の働きを経験したことがあるでしょうか。そして、私たちはそのような中であって、ダビデのように主を心からほめたたえ、主に對して心からの感謝をささげているのでしょうか。そう考えた時に、私たちは主に目を向けることが少なく、主への感謝の乏しい者であることを自覚させられます。常に主の恵みや御手のわざ、主が助けを与えてくださったこと、主の豊かな導き、さまざまなことに対して、またどんな小さなことでも、否、むしろ小さなことに対して常に目を向けて、主を心からたたえ、主に感謝をささげる者でありたいと思わされます。

7月18日(土) サムエル記第二22章2～4節

「ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は敵から救われる。」(4節)

2～4節において非常に興味深いのは、「主よ」という呼びかけの後、主なる神がさまざまな比喩的表現で例えられていることです。「わが巖」「わが砦」「わが救い主よ」「身を避ける、わが岩なる神よ」「わが盾」「わが救いの角」「わがやぐら」「わが逃れ場」「ほめたたえられる方」とあります。このようにさまざまな言葉を駆使しながら、ダビデは主がどのようなお方を言い表しています。

まず「わが」という言葉が、最初についています。つまり、これはダビデと主なる神とのきわめて個人的な関係を表しています。ダビデは主を信じる信仰により、このような主との親しい関係へと導かれました。私たちも、信仰により罪を赦され、神の子とされ、神を父と呼びことができるようにされました。それだけではなく、私たちも神を「わが巖」「わが砦」「わが救い主よ」「身を避ける、わが岩なる神よ」「わが盾」「わが救いの角」「わがやぐら」「わが逃れ場」「ほめたたえられる方」と呼ぶことができるのです。そのような信仰へと導かれたことに感謝をささげましょう。

次に「あなたは私を暴虐から救われます。」「この主を呼び求めると、私は敵から救われる」とありますが、ダビデは彼の人生の中でさまざまな経験をしてきました。特に、彼の人生には暴虐と思えるようなことがあり、多くの敵が彼の周りにはいました。主は、そのような中から救い出されたのです。ダビデは決して何の問題もない中で信仰生活を送ったのではなく、厳しい人生の荒波と思えるような戦いの中で信仰を働かせつつ、主に頼りながら生きてきて、そのダビデを主は常に救われ、助けてくださったのです。

そして、4節に「この主を呼び求めると」とありますが、ダビデが信仰をもって主を呼び求めた時に、主はその祈りに答えて彼を救い出してくださったのです。もちろん、主は祈らなければ人を助けてくださらないお方ではありません。しかし主は私たちが祈ることを待っておられます。なぜなら祈るとは、私たちのへりくだりの一つの現れです。つまり、謙遜に主の御前に出た時に、高き者を低くされ、低き者を高くされる主は、私たちを助けてくださることで、私たちを高くしてくださるのです。私たちも謙遜に主の助けを祈り求めているのでしょうか。主が高くされようとするほどに、私たちはへりくだって、祈っているのでしょうか。

7月19日(日) サムエル記第二22章5～7節

「私は苦しみの中で主を呼び求め、わが神に叫んだ。主はその宮で私の声を聞かれ、私の叫びは御耳に届いた。」(7節)

今日の箇所を見ますと「死の波」「滅びの激流」「よみの綱」「死の罟」とありますように、ダビデが命の危険の中で死を覚悟したことが何度もあったことが分かります。それは、ダビデにとってはこの上ない苦しみだったことでしょう。「私は苦しみの中で主を呼び求め、わが神に叫んだ。」とあります。私たちもそうですが、苦しみの中で、主を呼び求めることのできる恵みが与えられていることに心より感謝をしたいと思います。「主はその宮で私の声を聞かれ」とありますが、ここの宮とは神が臨在しておられる天を指しています。生ける主は、私たちの声を聞いてくださるお方であり、私たちの叫びは必ず主の御耳に届きます。私たちは、その信仰をもって主に熱心な祈りをささげるのです。ここで聞くと訳されている言葉は、何となく聞くというようなことではありません。むしろ、呼び求める声や叫びに何とかして答えよう、叫びに答えて助けようとの思いをもって主は私たちの祈りを聞いてくださっているということです。そ

して、「私の叫びは御耳に届いた」とあります。「御耳に届くだろうか」ではなく「御耳に届けばいいのに」でもなく、また「御耳に届くかもしれない」でもなく、「御耳に届いた。」と言っているのです。つまり、叫びが確かに主の御耳に届いたことをダビデは確信しているのです。

私たちも日々主に祈りをささげていますが、どのような信仰をもって私たちは祈っているでしょうか。私たちの祈りが主の御耳に届いたとの確信を得るような祈りをささげているでしょうか。特に、危機的状況や苦しみの中で、物事がうまくいかない悩みの中で、涙をもって祈らなければならない中で、そのような祈りの確信が私たちに平安を与え、希望を与えるような祈りになることを願います。祈ることの恵みを知っている私たちが、その恵みをむだにすることなく、祈りを用いてその恵みをさらに大きな恵みへと変えてまいりたいと思います。